東京大学文学部列品室所蔵青銅爵に関する考察
―特に製作技術の面から―

鈴　木　　舞

要旨　本稿では、東京大学文学部列品室所蔵の２点の二里岡期青銅爵を主な検討対象としている。その中でも特に、その製作技術に注目し、殷代初期における青銅器製作工人の系統に関して考察を行った。最初に、両爵それぞれの器形に基づいて、年代の位置づけを行った。次に、その製作技術面，とりわけ器表面に残る合范線から、製作時の鋳型構造の復元を試みた。その結果、そのうち１点の爵は、器形からは二里岡期の中でも特に早い段階に位置づけられる一方、鋳型構造から見ると二里頭期の技術を使用し続けていたということが分かった。このような青銅爵の存在を明らかにすることで、殷代初期の段階では、青銅器の生産を依頼した側は二里岡系，つまり殷系であったのに対し、一部の青銅器製作者たちは二里頭系，つまり「夏」系であったという可能性を提示した。

キーワード　：　青銅爵，合范線，鋳型，製作技術，二里頭期，二里岡期

はじめに

東京大学文学部列品室には、1930 年代江上波夫によって大陸から将来された二里岡期青銅爵 2 点が収蔵されている（以下では「本学所蔵爵 c1223 或いは c1224」と称する）。本稿では、この 2 点の青銅爵を手がかりとして、特にその製作技術面に注目し、二里頭期から二里岡期への青銅器製作技術の変化及びその継承に関して、検討を行った。

その手順として、まず第 1 章では、本稿の検討対象である本学所蔵爵の観察を行い、器形やその范線構造及びそこから復元される鋳型構造などについて、観察を行った。なお、本稿は、両爵の資料紹介も兼ねているため、その来歴についても第 1 章第 3 節において、やや詳しく記した。次に、第 2 章では、器形の型式学的検討から、両爵のより詳細な年代を明らかにした。つづく第 3 章では、両爵の器表面に残されている合范線から、器製作時の鋳型構造の復元を試みた。それにより、第 2 章で明らかにした，器の型式からの年代との差異について考察を行った。

１. 本学所蔵青銅爵の紹介

本節では、本稿が主要な検討対象としている本学所蔵爵 2 点について観察を行った。これらは、収蔵以来文学部列品室にて保管されている遺物であり、現在ではそれぞれ「c1223」「c1224」と番号付けられている。両爵ともに、1930 年代に江上波夫によって将来されたものとの記録が残って

いる[1)]。以下、第 1 節及び第 2 節では、それぞれの観察結果を記し、第 3 節ではこれらの来歴について詳述した。

（1） c1223 について【図 1】

① 器形

本件は平底爵である。足の一部が欠損している[2)]。流と尾を備え、この部分はともに外向きに反り返っている。口縁部は、外側がやや肥厚している。口唇部から約 5 ㎜のところで段差が設けられており、そこから器身本来の厚さになる。口縁部の流の付け根の部分には、柱がある。本来双柱であるが、現存しているのは 1 本のみである。柱の高さは約 1.2 ㎝である。釘形の柱帽を持つ。器身は頸部がやや長く、垂直に立ち上がっている。頸部と腹部との間には、はっきりとした境目が存在しており、腹部はやや張り出している。器身の一方の側面には、鋬が備えられている。鋬上部には、鏤孔を作ろうとした痕跡が認められ、縦 2 ㎜横 3 ㎜ほどの楕円形の孔が開けられている。器身の底部は平らで、平面形はナツメ形である。そこには 3 本の足がつく。それぞれ断面は三角形であり、下に向かうにつれて、外向きにやや反り返る。器高 13 ㎝、流尾長 14.5 ㎝、頸部幅 7 ㎝、器身の高さ 7.5 ㎝、足の高さ 4.5 ㎝である。器形から考えると、典型的な二里岡期の青銅爵と言えるだろう。なお、二里岡期内でのより詳細な年代的位置づけは、第 2 章で検討を行うこととする。

② 紋様

器身の頸部には、両面に、横方向に 1.2 ㎝の幅で、2 本の凸弦紋が施されている。その間に直径約 7 ～ 8 ㎜の 4 つの連珠紋が施される。

③ 合范線

本稿第 3 章の目的である，鋳型構造の復元のため、器表面に残されている合范線の観察を行った。なお、以下のＡ～Ｅは、【図 1】中に示した位置及びそのアルファベットと対応している。

Ａ．器身底部　器身底部に、各脚部の付け根と底部中央を結ぶようにして、Y 字型の范線が確認できる。また、范線を切るようにして、スペーサーが 1 点確認できる。

Ｂ．器身側面　流の直下で、器身の表裏の紋様にずれが生じている。また、器身の両側面ともに、縦方向に幅 5 ㎜程度の段差が生じている。その多くは、研磨によって消失してしまっているが、頸部の紋様に相当する部分については、研磨困難のためかその突出部分は研磨しきれていない。鋳型の合わせ目であると考えられる。

Ｃ．足部　足部にも 3 本中 2 本に縦方向の合范線が確認できる。なお、この 2 本についても研磨はされている。とはいえ、研磨し切れていない部分があり、鋳バリの痕跡は明らかである。残り 1 本の足については、研磨の痕がはっきりと確認できており、そのため范線は消失してしまったものと考えられる。

Ｄ．鋬　鋬の内側に相当する，器身上に鋬の上下の付け根を結ぶようにして、縦方向に 2 本の范線が確認できる。向かって右下にある，器身に施された紋様と鋬の范線との交差部分を見ると、紋様

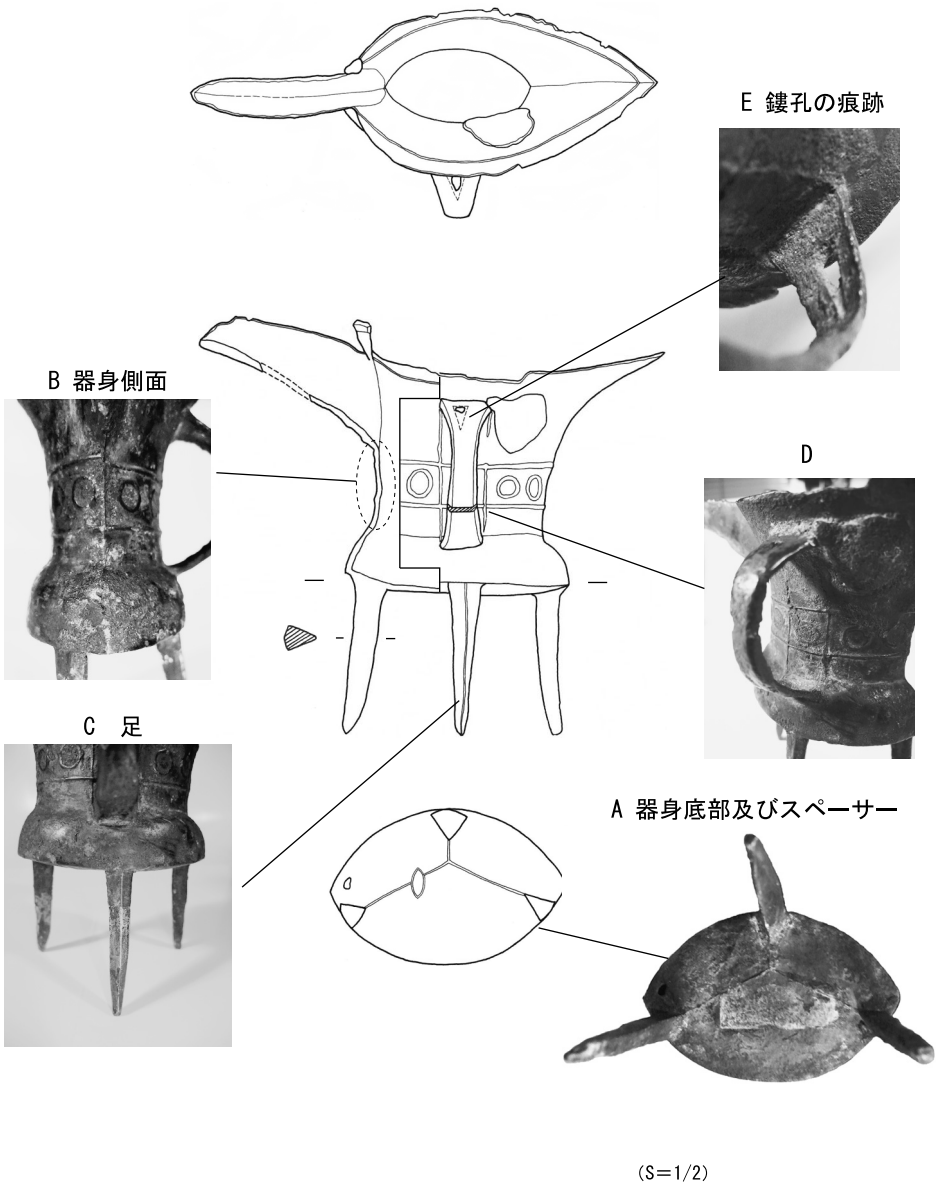

図 1　c1223 青銅爵（東京大学文学部列品室所蔵）

の上に鋬の范線がかぶってしまっているのが確認できる。なお､他の 3 ヶ所の交差部分については、研磨によって交差地点が不明瞭になってしまっている。

E．鏤孔　鋬の上部には、逆三角形の鏤孔をつけようとした痕跡が見られる。その場所は、外側から鋬を見るとただ単に湯が回りきらず、穴が開いてしまったように見えるが、鋬の裏側から観察してみると、本来は逆三角形の鏤孔となるはずであった場所に湯がはみ出てしまい、本来の鏤孔であ

るべき場所が鋳バリによって埋められてしまっていることが分かる。

Ｆ．鋳掛け　器身外面の鋬の右上には、鋳掛けの痕跡が見られる。大きさは 2 ㎝ ×2 ㎝ほどで、不規則形を呈する。

以上の范線の痕跡をもとに、本件を鋳造した際の鋳型構造の復元を試みる。まず、底部の Y 字范線及び三足それぞれの中央に縦方向に見られる合范線から、底部及び足外面にかけての鋳型が 3 分割されていたことが分かる。また、c1223 青銅爵の特徴のひとつとして、上で述べたとおり、鋬に鏤孔を設けているという点が指摘できるだろう。

（２） c1224 について【図 2】

①　器形

平底爵。本来は流・尾をも備えた完形品であったと思われるが、現在では頸部上部で切断されている。切断面には金属器によって切り取られたような平行線が幾重にも走っており、近年土中より掘り出された後、切断されたものと考えられる。頸部は比較的長く、垂直に立ち上がっている。頸部下端に外向きの屈曲があり、頸部と腹部がはっきりと分かれている。腹部の高さは頸部とほぼ同じであり、この時期の青銅爵の腹部としては、比較的高い部類に入ると思われる。器身の底部は、やや丸みを帯びている。器身底部の平面形はナツメ型である。器身底部には、3 本の足がつく。その断面は三角形である。紋様の施されている面は反対側の面には、鋬のついていた痕跡がある。鋬の上端は今や存在しないが、下端については器身の腹部にその痕跡が残されている。流・尾部分については明らかに切り取られた切断面が存在するのに対し、鋬の下端はまるでもぎ取られたかのような痕跡が残る。一部に本来の青銅の色，つまり黄金色が見えている箇所がある。残高 11.8 ㎝、頸部残高 6.3 ㎝、頸部幅 7 ㎝、足の長さ 5.5 ㎝。本件もまた、器形から見ると、典型的な二里岡期の青銅爵であると言える。

②　紋様

器身頸部の片面のみ（鋬のついていない面）に紋様が施されている。幅 1 ㎜程度の凸弦紋が横方向に 2 本施されており、その間隔は約 1 ㎝である。それらの間には、交互に斜め方向の凸弦紋と乳丁紋が施される。

③　合范線

c1224 青銅爵についても、合范線の観察を行った。なお、c1223 同様、以下の A ～ F は【図 2】中のアルファベットと対応している。

A. **底部**　底部范線は確認できない。また、研磨の痕も確認されない。なお、器身底部は、現状では錆に覆われている部分があり、その上から樹脂のようなものでもって遺物管理用のラベルが貼られている状態である。その上で観察を行うと、まず器身中央部は錆のため、底面の一部に盛り上がりが見られる。この部分の錆は明らかであるが、その周囲については錆が薄くても合范線の痕跡が見られない。

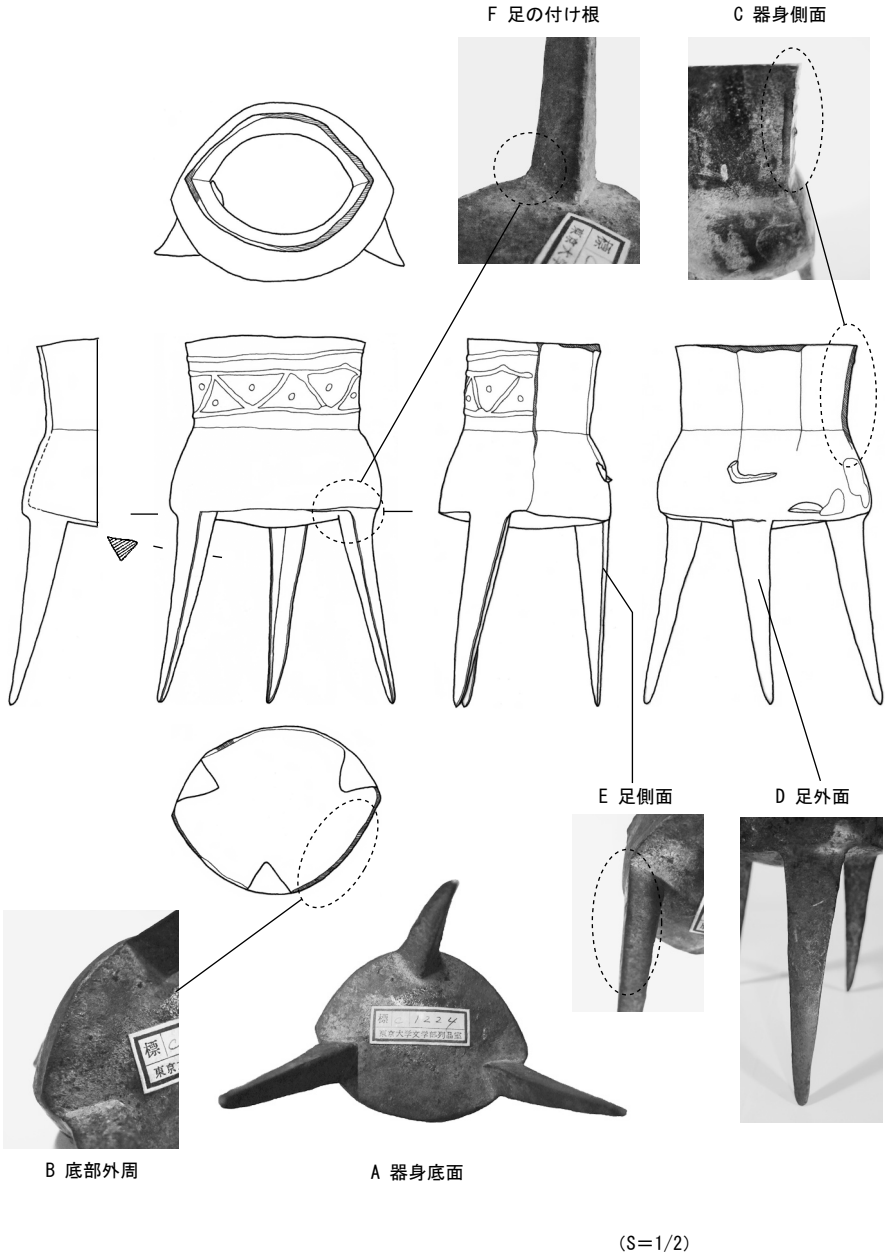

図 2　c1224 青銅爵（東京大学文学部列品室所蔵）

B. **底部外周**　器身底部の外周に当たる部分には、何らかの突出及び研磨の痕が確認できる。磨くことによって、段差を削りおとそうとしている。このような痕跡が、器身底部の外周全体にわたって見られる。ここに、鋳型の合わせ目が存在していたと考えられる[3)]。また、器身底部と足との接続部分に触れると境目が感じられ、このことからも、ここが鋳型の境目であった可能性がある。

C. **器身側面**　器身の側面には、頸部から腹部にかけて、縦方向にはっきりとした境目が存在し、かつその部分だけ、周囲の器壁より一段盛り上がっている。現状では、盛り上がりの表面に研磨の痕が確認でき、段差はずいぶん減ぜられてはいるが、おそらく鋳バリの痕と考えられる。研磨の痕跡は、肉眼で見て取れ、幅 0.5 ～ 2.0 ㎜程度の縦方向の線の表面に、横方向の磨きの痕が確認できる。ここが鋳型の境目であると考えられる。

D. **足外面**　三足とも平面である。一般的な二里岡期青銅爵に確認できるような、三足それぞれで縦方向に走る范線は、いずれの足にも見られない。また、范線を削ったと考えられる研磨の痕も見られない。ただし、（A）底部范線同様、錆のために、本来あった研磨の痕すらも確認困難になっているという可能性も考慮する必要があるかもしれない。

E. **足側面**　鋬直下の足の外向きの各角 2 つに、明らかな段差が認められる。おそらく鋳バリの痕と考えられる。ただし、すでに研磨されているらしく、鋳バリは鋸歯状のまま残っているというわけではない。

F. **足の付け根**　三足のうちの 1 本は、その付け根の部分に、器身の外表面と足の外面とで平面を形成する形で、その角部分に鋳バリの存在が認められる。

G. **鋳掛け**　器身腹部（鋬側）に 2 ヶ所確認できる。

以上の観察結果に基づいて、c1224 青銅爵の鋳型構造を復原すると、器身部が表裏 1 枚ずつ，足部も表裏の 1 枚ずつ，また器身底部に 1 枚，器身の内部に 1 枚、といった構造であった可能性が高いと考えられる。

（３） 来歴

次に、本学所蔵爵 c1223 及び c1224、両者の収蔵経緯及び出土地点について述べたい。

まず、その収蔵経緯であるが、両者を紹介した『考古図編』第 10 輯での記述に依れば、両者ともに江上波夫の将来品とのことである。また、かつて、将来者である江上本人が、その著書『内蒙古・長城地帯』「綏遠青銅器」の項で、この 2 点の青銅爵について言及している（江上 1935）。これは、江上らが 1930 年 8 月から 9 月にかけて、綏遠・包頭を訪れて、オルドス青銅器の出土地・出土状態の調査を試みた際の報告である。その序言には、次のように記されている。

「‥‥‥ われわれは綏遠地方の現地調査を思立ち、三上次男君とともにこの方面に旅行を試みたのは昭和五年八月、九月の候であつた。かくてわれわれは綏遠・包頭・五原の地を訪ひ、その青銅器の出土地、出土状態などを調査しようと努めたのである。‥‥‥。‥‥、われわれの蒐集した青銅器類は、斧頭・短剣・刀子・鏃・弩機・棍棒頭・甲冑小札等の利器武具類、馬面・轡・馬鐸・馬鈴・革金具等の馬具類、帯鉤・絞具・紐金具・飾小金具・垂飾品・釦等の装飾具類、古銭・印章・鏡鑑・銅容器等の各種を含んでゐる。これを購入したのは主として包頭と帰化城の古物商であつた。‥‥‥ またわれわれは同年四月、十月十二月、翌年一月、六月などに数回張家口を訪れて、若干の青銅器を購入した。それに北平に於いて購入され、いま東

京及び京都の両帝国大学に所蔵される同系統の遺品をも参考の為めこゝに附載した。」

このとき得た青銅器は、現在では東京大学及び京都大学で所蔵されているとのことである（高浜 1997）。本件についても、おそらく 1930 年の調査の際，或いはその前後の張家口・北平行きのいずれかの機会に入手し、帰国後、本学文学部列品室に寄贈したものと考えられる。

次に、出土地についてであるが、『内蒙古・長城地帯』の本文中では、特に c1223 を取り上げて、

「爵・・・を模倣したと思はれる銅容器が北支那から出土してゐる。その出土地の詳細は不明であるが、その製作・意匠に綏遠式の特徴が充分に認められる。」

という記述が見られ、その注には、

「・・・・・・出土地が明瞭でない故に、確実なことは云ひ難い。しかし爵形容器はそれが周式の爵から派生したことが明白であるにもかゝわらず、変化が大で、周式文化圏外の所産と推定され、その粗製薄手の作と相俟つて支那北辺製作が考えられる。」

と記される（江上 1935）。つまり、爵そのものの作りの粗さと薄さに基づいて「支那北辺」の製作と推測しているわけである。ここで、1935 年当時の資料状況を考えてみる。1935 年段階では、未だ殷墟遺跡の発掘が始まってまもなくという時期であり、殷代後期の青銅爵の存在は知られ始めたものの、これを遡る，つまり本件が相当する殷代前期の遺跡及び遺物の存在は、未だ明らかになっていない段階である。殷代前期の存在が知られるようになるのは、1950 年代になってからである。本件を作りが粗く，薄手であると判断したのは、当時明らかになっていた殷代後期の青銅爵と同時期のものという前提条件の下で、比較しての判断と思われる。とすると、それを根拠とした「北支那出土」という判断も、現在では受け入れがたいものとなる。なお、両爵を紹介した考古学研究室編輯『考古図編』第 10 輯中でも、「北支那出土銅爵」として紹介されているが、おそらく江上の著書を受けての記述であると思われる（東京帝國大學文學部考古學研究室 1936）。

以上、将来者本人が明確な出土地を知らないことから、おそらく上述のオルドス青銅器の調査旅行の際に、立ち寄った町で購入したものと推測される。この著書の中では、本学所蔵爵 2 点の入手地点について、具体的な地名は明記されていないが、購入地については「北支那」或は「支那北辺」と言えるのかもしれない。しかし、出土地は分からない。また、本件の出土地を「支那北辺」とした根拠についても、上述の理由より、現在では成り立たないということになる。なお、調査旅行が 1930 年夏、なおかつ 1935 年出版の『内蒙古・長城地帯』で「東京大學文學部蔵」とされているので、当該爵が考古学研究室にもたらされたのは、1930 ～ 1935 年の間ということになるであろう。

２．比較材料の提示

前章では、まず本稿で検討対象となる 2 点の青銅爵についての紹介及び観察結果を記した。本節以下では、この 2 点の青銅器について、発掘及び採集によってその存在が明らかにされている二里岡期青銅爵を比較材料として、その位置づけを明らかにしたい。特に、その器形から年代的位置づ

けを明らかにすること（第 3 章），また、その製作技術面からの位置づけ（第 4 章）、以上 2 方面から検討を行った。

そこでまず、比較資料の範囲を決めたい。現在までのところ、中国国内で発見され、なおかつその写真或いは実測図等のある程度詳細なデータが公表されている二里岡期青銅爵は、100 点以上にのぼる【表 1】。これらは、その出土地【図 4】から考えると、大きく 3 つに分類できると思われる。つまり、以下の 3 地区である。なお、次に示した No.1 ～ No.118 の番号は、【表 1】中の各青銅爵につけた任意の番号に相当する。

① 鄭州商城（現在の河南省鄭州市）を中心とした地区 ……33 点（No.1 ～ 33）

② 盤龍城遺跡（現在の湖北省武漢市）を中心とした地区 ……38 点（No.34 ～ 71）

③ 上記以外の地区 ……47 点（No.72 ～ 118）

ここで、殷代前期の政治状況を考えてみると、これらの 3 地区には以下のような意味づけをできるだろう。つまり、①当時の中心地区，つまり都である鄭州商城を中心とした地区，②殷の南方支配の拠点であったとされる盤龍城遺跡を中心とする地区，③これらの中心地からはやや外れるが青銅爵が出土する等、何らかの殷の影響を受けていると考えられる地区，という見方である。

これらの 3 地区のうち、本稿では鄭州商城出土爵を比較材料として、検討を行っていきたい。鄭

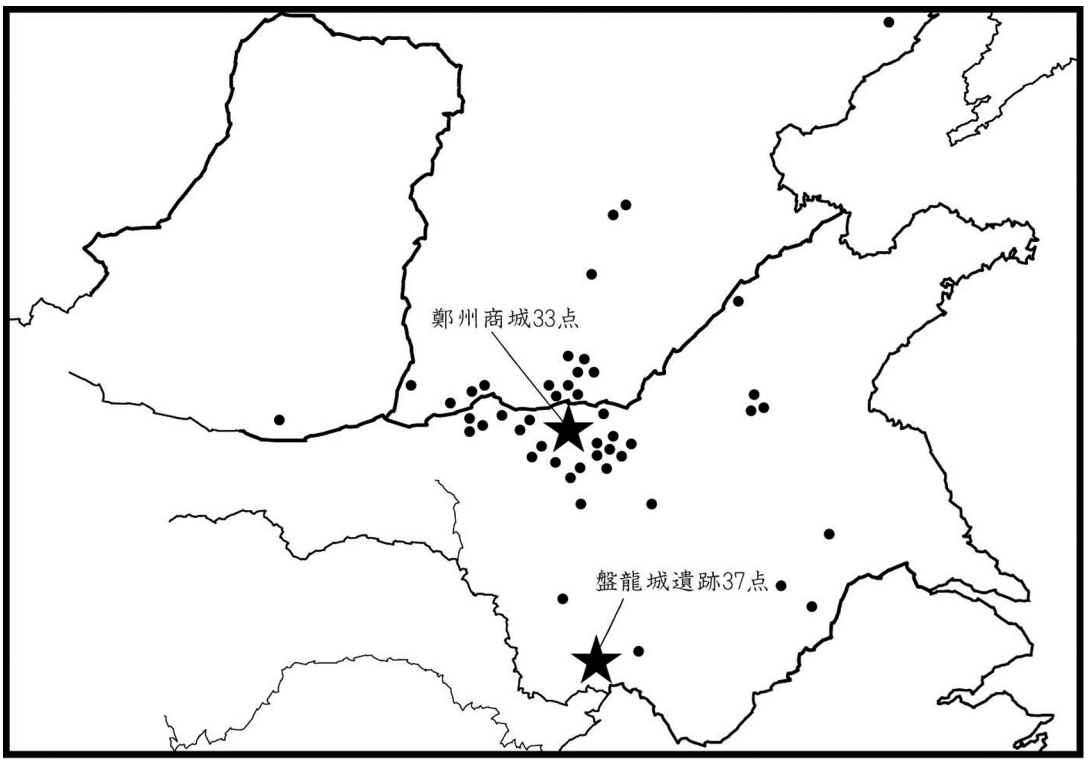

図 4　二里岡期青銅爵の出土地点

州商城は殷代前期の都城址と考えられており、当時の中心地区と言える。青銅器の生産という面から言えば、遺跡内では既に複数の青銅器製作工房の存在が確認されており、青銅容器の鋳型も出土していることから、ここを当時の青銅容器の生産拠点のひとつとして考えて間違いない。一方、製品という面からも、鄭州商城内ではすでに、c1223 及び c1224 青銅爵の類似資料が出土している。また、現在では鄭州出土青銅爵は 30 点以上を越え、型式分類を試みるに当たっても、それに耐えうる一定の出土数を越えていると思われるからである。

前章では、本稿で取り扱う本学所蔵爵の観察を行った。次章以下では、本章で【表 1】A. に挙げたこれまでの出土資料及び先行研究の中に、本学所蔵の 2 点の爵を位置づけたい。その際には、①器形から見た年代の位置づけ、②製作技術から見た年代の位置づけ，以上ふたつの方向から検討を行うこととした。

３．二里岡期青銅爵の編年に関する再検討

（１）先行研究の整理

これまで、二里岡期の青銅爵の型式分類及びより詳細な時期区分を行った研究としては、鄒衡，飯島武次，林巳奈夫，難波純子，杜金鵬、以上 5 人の論考を挙げることができる。

まず最初に挙げられるのは、鄒衡氏である（鄒 1980）。鄒衡氏は、殷代前期から殷代中期にかけての爵を、鄭州商城，盤龍城遺跡，殷墟遺跡で出土した爵を材料として、3 段 6 組に時期区分した。その際、①腹部断面の形状，②柱の形状及び流との位置関係、以上 2 点に注目している。

日本人研究者としてこの問題に初めて言及したのは、飯島武次氏である（飯島 1979）。飯島氏は二里頭文化と二里岡文化との継承関係を証明する際のひとつの材料として、青銅爵の問題を取り扱った。二里岡期については、まず器身の高低を基準として二系統に分類し、さらに系統ごとの時間的な変化を追っている。時期区分としては、「二里岡期」という区分のみである。なお、近年出版された著書の中では、「二里岡期下層」「上層第 1 期」「上層第 2 期」という時期区分を採用している（飯島 2003）。

3 点目は、林巳奈夫氏の著書『殷周青銅器総覧』の中で示された編年である（林 1984）。林氏は、二里頭期から西周期までの爵を 5 型式に分類し、さらにそれぞれを年代順に並べている。本稿での検討対象は、その中でも平底を特徴とする「Ⅰ型爵」である。時期区分については、鄭州商城出土のものは一括して「殷中期Ⅰ」としている。なお、林氏は殷中期のうち、「殷後期への過渡的性格をもったものを …… 殷中期Ⅱとし、それ以前の型式を殷中期Ⅰ」と見なしている。現在の一般的な年代観に置き換えると、「殷中期Ⅰ」とは殷代前期,「殷中期Ⅱ」とは殷代中期に相当するだろう。爵の型式変化を考える際には、「流の形と、流と容器部の附き方」に着目しており、「殷中期Ⅰ」では「流はかなり上向きとなり、長さを減ずると共に深いものとなる」という点、「殷中期Ⅱ」では「流がさらに長さを減ずる」という点を、その特徴として指摘している。

4 点目として挙げられるのは、難波純子氏の編年である（難波 1989）。難波氏は、二里頭期から二里岡期にかけての青銅彝器全体の編年の作成を試みている。その際､爵についても言及しており、頸部に施された紋様，とりわけ饕餮紋と柱の型式変化を基準として、二里岡期の青銅爵を 4 時期に区分し、それぞれの時期を土器の 4 期編年と対応させた。

5 点目は、杜金鵬氏による編年である（杜 1994）。杜金鵬氏は、二里頭期から西周期にかけて、中国出土青銅爵のすべてを取り扱い、編年を作成している。特に二里岡期については、2 期に区分している。二里岡期の第 1 段階は二里岡下層 2 期相当､第 2 段階は二里岡上層期に相当するとする。時期区分の際の着目点としては、①柱の形状，②器身の形状，③器身の断面形，④紋様の複雑化、以上の 4 点を挙げている。また、盤龍城遺跡で出土するような管流爵を、それ以外の爵とは分けて考えている。

（２）編年案試論

上で挙げた先行研究及びそこで示された分類基準を参考に、本稿でも改めて分類を試みる。

1 つ目の基準として、上述の分類基準の中で、杜金鵬が管流爵を別置した点は同意する。このような爵は、現在までのところ、盤龍城遺跡に出土地点が限られている。盤龍城遺跡は、長江中流域，現在の湖北省武漢市に位置し、鄭州商城とほぼ同時期の，殷の南方拠点と考えられている。盤龍城遺跡出土の青銅爵について言えば、杜金鵬の挙げた流の形状の差異のみならず、紋様という点からも、鄭州出土のものには見られない独自の紋様が見られる。また、ここでは青銅器製作工房も発見されており、独自に青銅器生産を行っていた可能性も考える必要がある。盤龍城遺跡に見られる管流爵は、ひとまず別置すべきであると考える。

この他、林が流の長さに時間の変化を捉えた点，難波や杜金鵬が柱の型式変化に注目した点、以上 2 つの観点については、現状の資料を見ても納得できる基準であると思われる。また、二里岡期だけでなく、二里頭期から二里岡期，殷墟期，西周期というより大きな流れの中で考えても、妥当であると思われる。

ここで、筆者なりの分類を行ってみたい。ここで、二里周期青銅爵の編年を改めて組み立てることは、より詳細な型式分類・型式変化を明らかにすることによって、本学所蔵爵の年代的位置づけをより詳細にすることを目的としている。

そこで、時間的変化を追う前に、まずは同時期における型式差について考えたい。飯島や難波或いは杜金鵬が指摘した通り、二里岡期の爵には、明らかに同時期に複数の型式が存在している。本稿では、【図 5】のように、3 つの型式が存在した可能性があると考えた。すなわち、

A 型　：　器身に占める腹部の割合が低い。また、腹部が丸みを帯びる。

B 型　：　器身に占める腹部の割合が低い。また、腹部がほぼ垂直に立ち上がる。

C 型　：　器身に占める腹部の割合がやや高い。また、腹部が丸みを帯びる。

である。なお、このような 3 型式に分類すると、紋様もこれに対応しているということが分かっ

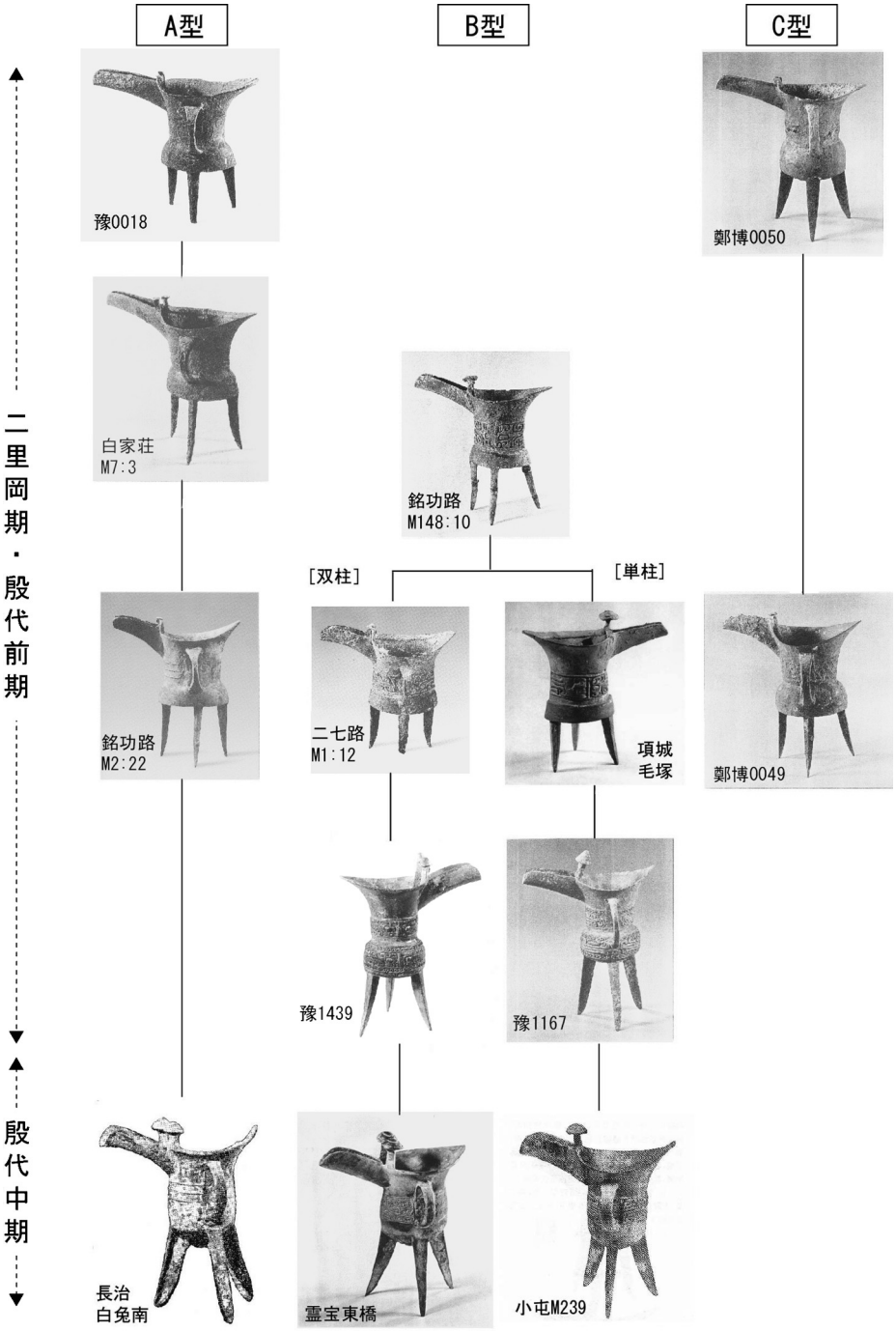

図 5　二里岡期青銅爵の型式変化

た。つまり、A 型では多くの場合、頸部に 3 本の弦紋を施すこと，同じように、B 型では頸部に饕餮紋を施すこと, C 型は比較的幾何学紋が多いということである。また､B 型（及び B′ 型）に限り、時期が下ると単柱が出現する。これは殷墟期初期段階まで継続する。以上の二つの特徴の対応関係から見ても、この分類は妥当であると思われる[4)]。

次に、時間的な型式変化について考えたい。その際の注目点としては、先行研究でも示されたように、①柱および柱帽の型式変化や②流の長さの変化などが挙げられよう。具体的に言うと、①柱および柱帽については、二里岡期の最初の段階では、(a) 柱の上に一定の形態を持たない発展途上の柱帽がつく。その後、(b) 半球形の柱帽、(c) 円錐形の柱帽へと変化していき、最終的には (d) 柱帽に円渦紋まで施されるようになる。また､(a) から (d) へと柱帽の形態が変化するだけでなく、大きさもまた徐々に大きくなっていく。なお､【表 1】中の「柱帽」の項の a ～ d は､以上の (a) ～ (d) に対応している。②流については、時期が下るにつれて、その長さを減じていくだけでなく、流の付け根から先端まで全体にわたって幅が一定してくる。尾は、時期が下るにつれて徐々に短くなっていく傾向がみられる。また、おそらく最も早い段階と考えられる豫 0018 及び鄭博 0050 の特徴として、それ以降の爵と比較すると、③器高に占める足の高さの割合が低いという特徴が挙げられるだろう。また、足に注目すると、古い段階ほど直線的であり、新しくなるにつれて外に反り返る傾向があると言える。このような足の特徴は、二里頭期の爵にも言えることであり、前時代の特徴を引き継いでいるのかもしれない。

なお、B 型は、【図 5】からも分かる通り、時期が下ると特徴的な変化を示す。すなわち、頸部と腹部がそれまで以上にはっきりと分かれ、また腹部が高さを増す。頸部・腹部ともにそれぞれ饕餮紋が施されている。【表 1】中では、これを B′ 型として区別している。また、これと同じ段階の A 型は、依然として前段階とほぼ同じ形態を保つ。その後の段階，つまり殷代中期に至って、A 型･B 型（及び B′ 型）ともに、頸部と腹部の境界がほぼ無くなり、底部は丸底になる。腹部は丸みを帯び、頸部でやや収束する。殷墟期の爵にかなり近い形態となるが、殷墟期の爵よりは器身の高さに対する腹部直径の割合が高い。この段階においても､二里岡期以来の弦紋爵 (A 型) と饕餮紋爵 (B 型）の系譜は辿ることができる。これは、殷墟期においても同様に引き継がれる特徴及び分類である。殷墟期への過渡的段階と考えられる。なお、これらの殷代中期の爵は、型式的にはひとつになり、紋様に対応するような型式差が無くなる。これを、本稿【表 1】中では、便宜的に D 型とした。

以上の結果は、【図 5】のように表すことができると考えられる[5)]。なお、本稿は二里岡期青銅爵の編年の作成を試みたものであるが、上で述べてきたとおり、各型式のその後の時期，つまり殷代中期或いは殷代後期への継承関係も考慮した上で検討を行うべきと考えたため、【図 5】中には、一部で、殷代中期の青銅爵についても掲載している。

（３）本学所蔵爵の年代的位置づけ

前節までの検討により、二里岡期青銅爵に関する編年が作られた。ここで、第 1 章で取り上げた

本学所蔵爵の年代的位置づけを考えたい。

1 点目に c1223 であるが、【図 5】に示された各青銅爵と比較してみると、c1223 は器身の形態から A 型に分類される。また、その中でも特に、豫 0018 と白家荘 M7:3 の間に位置づけられると思われる。なぜならば、c1223 爵の特徴としては、流・尾が比較的長いこと，流の付け根の幅がやや広めであること，器高に占める足の長さが比較的低いこと，足にやや反り返りが見られる点などの形態的特徴を持っているからである。これらの特徴を考慮すると、豫 0018 よりは下り、白家荘 M7:2，同 M7:3 よりはやや早い段階に相当すると考えられる。また、具体的な年代に関しては、白家荘 M7 が二里岡下層期であることから、c1223 青銅爵も同じく二里岡下層段階と考えられる。

2 点目に、c1224 については、器身の形状から C 型と分類できる。また、腹部がやや締まっている点，足の反り返りが少ない点などから、その比較資料として、鄭博 0050 青銅爵を挙げることができるだろう。 c 1224 青銅爵は、C 型の中でも、二里岡期の特に早い段階のものであると考えられる。

４．製作技術に関する検討

前章での検討により、本学所蔵の 2 点の青銅爵が、器形から考えると、二里岡期の中でも比較的早い段階に位置づけられる可能性があるということが明らかになった。次に、この二者が製作技術の面からはどの時期に相当するのかということを考えてみたい。

(1) 先行研究の整理

まず最初に、爵の製作技術，特に鋳造時の鋳型構造に関して、従来行われてきた研究を整理する。先行研究としては、李済及び万家保，郭宝鈞，N. バーナード，難波純子，宮本一夫、以上 5 つの研究が挙げられるだろう。

殷代の青銅爵に関して製作技術面からの研究を行った第一人者としては、李済・万家保の両氏が挙げられる（李・万 1966)。両氏はその著書の中で、殷代，特に殷代後期の青銅爵の底部に残された合范線について初めて言及し、鋳型構造の復元を試みている。これは、現在台湾にある中央研究院歴史語言研究所で所蔵している殷墟遺跡出土の青銅爵を 1 点ずつ観察することによって、殷代後期の青銅爵の底部范が、Ｙ字状に三分割された分割范から構成されることを明らかにしたものである。解放後の台湾所蔵器に基づいて検討を行ったという点を考えれば、二里岡期の爵にまでは話が及ばなかったのは、仕方のないことである。青銅器の製作技術という面からの研究としては最も古いものであり、その後大陸で行われた，より早い段階の青銅爵に関する研究への先駆けと位置づけられるだろう。

これに続くのは、郭宝鈞による論考である（郭 1981)。このとき初めて、二里岡期青銅爵の鋳型構造について言及された。つまり、鄭州白家荘，輝県琉璃閣，盤龍城の 3 遺跡で出土した「中商銅器群」の爵の器身底部にＹ字范線の存在することを初めて指摘した。これもまた、著者自身の遺物

観察に基づいて行われた研究である。

次に挙げられるのは、N. バーナードらの著作である（Barnard・Cheung1983）。氏は、大陸で出土した各時期の青銅爵を実見した上で、爵の底部の鋳型構造の変遷について述べている。

日本人研究者として、初めてこの問題に言及したのは、難波純子氏である（難波 1989）。氏は、二里頭期から二里岡期の青銅爵の底部の鋳型構造の変遷について述べている

最新の研究成果としては、宮本一夫氏の論考を挙げることができる（宮本 2006, 2009）。宮本氏は、これまで発表された二里頭遺跡および鄭州商城遺跡出土の青銅爵について改めて観察及び実測を行い、斝・鼎などの他の三足器との関係の中で、爵の鋳型構造がどのように変化していったかを述べている。その論考中で示された結論は、【図 6】の通りである。つまり、(1) 二里頭期には、器身底部が 1 枚，器身から足にかけての外面は 2 枚の鋳型から成る（宮本の「双范 A，B 式」）。つまり、この段階の製作方法でもって作られた青銅爵の器表面には、器身の側面に鋳型の合わせ目が残るだけであり、器身底部や足の外面には鋳造の痕跡は残らないということになる。次に、(2) 二里岡期になると、最初は、器身底部の鋳型が 1 枚のままであるのは前段階と変化が見られないが、足の外面が三分割の鋳型になる。つまり、青銅爵そのものの器表面に残る合范線としては、①足 3 本の外面中央に縦方向の合范線，②器身底部には合范線は見られないということになる（宮本の「三范 A 式」）。さらに、(3) その次の段階に至って、足部分の外面の鋳型と、器身底部の鋳型が合わさり、両者を合わせて三分割するようになる（宮本の「三范 B 式」）。つまり、青銅爵の表面には、①足の外面中央に縦方向の合范線，②器身底部にY字形の合范線が残るということになる。また、鋳型構造の変化つまり青銅器製作技術の変化を、「夏」殷王朝の交替と結びつけた。

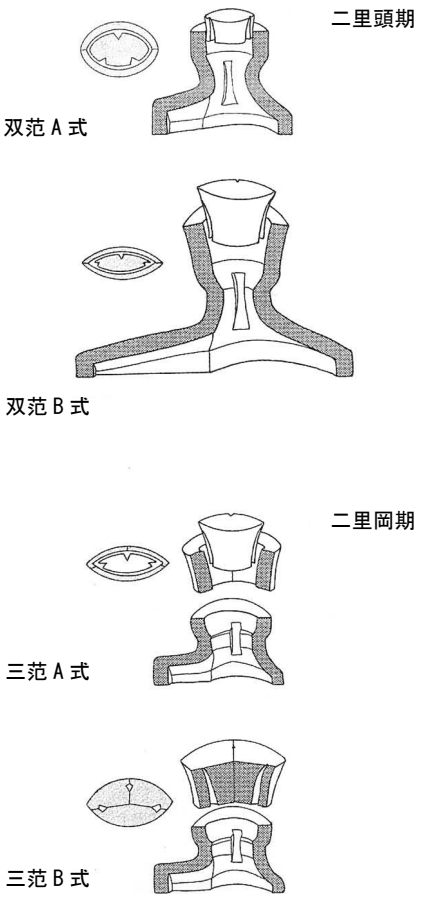

図 6　鋳型構造の変化

以上で挙げた先行研究からすると、二里頭期から二里岡期にかけての青銅爵の鋳型構造の変化については、宮本氏の説が最も新しいものとなる。また、宮本氏を始めとして、これらの見解はみな、実際の青銅器の観察に基づく結果であり、また、筆者自身が報告書や各地の博物館で見てきた青銅爵の大部分も上述の説に充分に当てはまっており、概ね同意できるものであると思われる。

（２）鋬の製作技法

前節までの整理により、二里岡期の青銅爵の鋳型構

造，とりわけ底部范線構造については、これまでも何人もの研究者によって論じられてきたということが分かった。ここで、本学所蔵爵，特にｃ 1223 爵の製作技術を考えるに当たって、もうひとつの特徴を取り上げたい。鋬の製作に関する問題である。

本学所蔵爵のうち、c1223 青銅爵は、第 1 章で述べた通り、鋬に鏤孔を持っている。しかし、【表 1】A に相当する鄭州商城出土青銅爵の「鋬の鏤孔」の項を見てみると、ここで出土した青銅爵の鋬には鏤孔は全く見られないということが分かる。また、盤龍城遺跡出土爵やその他の地区で出土している二里岡期の爵を見てみても、鏤孔を持つものは、今のところ 1 点も見られない。一方で、【表 1】Ｆの二里頭期の青銅爵を見てみると、鋬に鏤孔を設けるというのは、二里頭期に見られる技法であるということが分かる。

二里頭期の青銅爵にとっては、鋬の鏤孔は一般的な技術であると言える。装飾的な意味合いもあったのかもしれないが、それと同時に、鋬部分の外范と，鋬の内側に設置されたと考えられる半月形の范、この 2 つの鋳型同士を固定するという，型持たせの役割も果たしていたのだろう。鋬に鏤孔を設けるということは、二里頭期には多くの爵に見られる技術であるのに対して、時期が下るにつれて、徐々に見られなくなっていくこと，青銅爵同様に鋬を備えつつ、それよりも大型の器種である青銅斝では、二里岡期になっても鋬の鏤孔がしばしば見られることからも、技術的な問題が関わっていたと思われる。

（３）本学所蔵爵の位置づけ

以上の先行研究に基づき、最後に、本学所蔵爵 2 点の位置づけを行いたい。

1 点目の c1223 青銅爵は、第 1 章で述べたとおり、器身底部に Y 字范線，また足の外面にも縦方向の范線が確認されており、宮本の言う「三范 B 式」に相当する。その鋳型構造は一般的な二里岡期青銅爵と同様であると考えられる。ただし、鋬に鏤孔が存在するという点では、二里頭期の技術を一部で受け継いでいた可能性が考えられる。

2 点目の c1224 青銅爵については、器身底部及び足の側面に合范線の痕跡が確認できない。宮本の言う「双范 B 式」に相当する。つまり、二里頭期の技術を使用して製作したものと考えられる。

５．まとめ

本稿での検討の結果、本学所蔵爵 c1223 及び c1224 は、両爵ともに、器形から見れば、二里岡期に相当するということが分かった。しかし一方で、その製作技術を見てみると、両者ともに二里頭期の技術或いはその一部を未だ利用して製作していたということが分かった。すなわち、c1223 青銅爵については、器身及び足は一般的な二里岡期の鋳型構造をしているが、鋬の製作においては鏤孔を設けている。また、c1224 については、器身及び足の鋳型構造において、器身底部は 1 枚，足外范は 2 枚の鋳型で構成されていたと考えられ、これは二里頭期に使用されていた方法そのままと

いうことになる。

このような製作技術に反映されている歴史的背景とは、青銅器の製作を依頼した人物は、二里岡で代表されるような殷系統の人物であったが、一方で、青銅器の生産に実際に携わっていたのは、その前時代である二里頭期の技術を持った人間，つまり「夏」系統の技術を持った人物であったという可能性が考えられる。また、そのような影響の受け方についても、c1224 青銅爵のように全面的に「夏」系の技術である場合と，一方で c1223 青銅爵のようにおおむねは新しい方法でもって製作されているが、ごく一部に前世代の名残が見られるという場合もある。なお、さらに想像をふくらませれば､二里岡期に入っても二里頭期の技術が使用されていたということは､「夏」殷交替後も、「夏」の製作工人が依然として青銅器生産に従事していたということかもしれない[6)]。殷の成立問題を考える際、このような可能性は手がかりのひとつになると思われる。

おわりに

本稿での検討を終えて、以下の課題が残された。

まず 1 点目に、本稿では、本学所蔵青銅爵 2 点の観察を主に行っているが、これ以外の比較資料については、実見を経たものは非常に少ない。今回の検討結果をより確実なものとするために、今後中国現地での調査を行い、より多くの青銅爵を実見する必要がある。また、そうすることによって、本稿で分類を行った二里岡期青銅爵の 3 型式が、紋様のほかにも何らかの対応関係を持っているのか否か，また、持っているとしたらそれは何に起因するものなのか等を明らかにし、殷代前期における青銅器製作者集団について、さらに踏み込んだ検討を行いたい。

また 2 点目に、本稿では、爵のみに依って検討を進めたが、同時期の他の器形についても検討を行うことが必要である。特に、同じく三足器である青銅斝の製作方法は、青銅爵の生産と何らかの関わりを持っている可能性も考えられ、比較検討の必要があると考えられる。

謝辞

本稿は、アジア鋳造技術史学会 2009 年度東京大会における口頭発表に基づいて作成した。大会では複数の先生方からご助言をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

註

1）文学部列品室では、戦前以来、本研究室関係者の収集及び寄贈によって、国内外の考古資料が多数収蔵されている。遺物収蔵時の記録としては､旧遺物台帳, 旧遺物カード, 現行の遺物台帳, 現行の遺物カード、以上 4 種の情報が残されている。そこには、収蔵年月日，寄贈者名，出土地などが記されている。また、東京大学考古学研究室によって出版されている図録として『考古図編』全 20 輯があるが、一部の遺物についてはそこで紹介されている。本稿で取り上げた 2 点の青銅爵の場合､両者ともに､現行の遺物カードに「青銅器爵」という記述が見られ、また､『考古図編』第 10 輯では「北支那出土銅爵」、江上波夫の将来品であるという 2 つの情報が記されている。本件の来歴を説明するためには、これらの情報だけ

では不十分と思われたため、将来者である江上波夫本人の著書『内蒙古・長城地帯』での記述も参考にした（江上 1935）。

2）c1223 青銅爵は、現在では欠損部分の補修が行われているが、本来は鋬直下の足の下半分が欠損していた。このことは、収蔵後まもなく刊行された『考古図編』第 10 輯掲載の当該爵の写真を見ると分かる（東京帝國大學文學部考古學研究室 1936：図版二）。

3）実際に出土している青銅爵の鋳型からも、この点をあとづけることができる。河南省鄭州市に位置する鄭州商城遺跡では、遺跡内の 2 地点で青銅器製作工房が確認されており、そこで二里岡期相当の青銅爵の鋳型が出土している（河南省文物研究所 1989）【図 3】。当遺跡で発見された爵外范 C5:T69:1:45 は、爵の口縁部から器身底部にかけての外范である。右端には流の付け根部分も見られる。頸部には獣面紋が施紋されている。器身底部に至って、鋳型部分は平面となっており、おそらくこの部分が足部分の鋳型との合わせ目であったと考えられる。報告によれば、青銅爵器身部の鋬と相対する側の外范であり、流の付け根部分に位置する柱部分が欠損している。高さは 9.1 ㎝，残存している部分の幅は 5.5 ㎝，厚さ 3 ㎝とのことである。また、爵外范 C5:3H310:24 も、同じく青銅爵の器身部の外范である。報告によれば、比較的完形に近く、通高 9.1 ㎝とのことである。頸部に獣面紋が施紋されている。これもまた、器身底部との境目部分は平面となっており、ここに鋳型の境目が存在していたと考えられる。以上、製作工房址出土の遺物から考えてみても、器身底部と足部との間に鋳型の合わせ目が存在していた可能性が高いと言えるだろう。

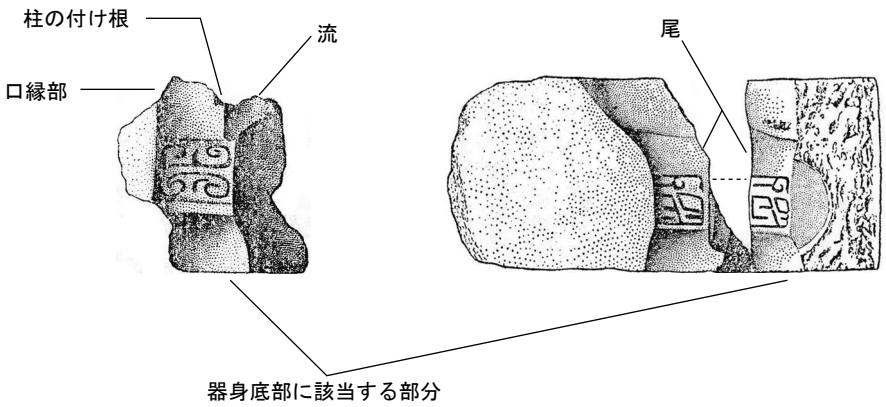

図 3　鄭州南関外遺跡で出土した青銅爵の鋳型

4）ただし、このように 3 系統に分類できることが、当時の青銅器生産体制の中で何を反映していたのかは、今後検討の余地がある。製作者集団が違っていたのか、或いは工房が違っていたのか，或いは何も違いはないのか等、青銅器そのもの製作技術等，詳細な観察によってさらに何か差異が発見されれば、この分類の意味が分かるかもしれない。

5）なお、【図 5】に示された各段階の爵の具体的な年代について、筆者は次のように考えている。本稿で青銅爵の編年の作成を試みた際、基本的な材料は、鄭州商城遺跡の正式報告である『鄭州商城』から採っ

ている。しかし、この報告書で示された年代観そのものが未だ決定的なものとは言えず、検討の余地があると考えている。また、この他にも次のような問題点もある。報告書中で、例えば二里岡上層 1 期の青銅爵の項を見てみると、実際にはその形態は多様であり、また採集品を上層 1 期に組み入れてしまっているものも多い。報告書に掲載された青銅爵の中で、その時期区分の具体的な根拠を報告書中に求めてみると、共伴土器からの検討が行われている青銅爵及びそれを出土した墓は、下層 2 期段階では白家荘 32 号墓（共伴した陶爵の型式による), 32 号墓と同型式の青銅爵を出土した白家荘 7 号墓, 以上 2 基、上層 1 期段階では銘功路 4 号墓(共伴した陶斝及び陶簋による), 銘功路 125 号墓(共伴した陶鬲による), 北二七路 1 号墓（共伴土器を根拠とする旨は記されているが、その土器そのものの図は掲載されていない), 北二七路 2 号墓（墓に切り込んでいた文化層の年代による), 北二七路 4 号墓（共伴した陶鬲･陶斝･陶爵の型式による)，以上の 5 基だけである。これ以外の墓で出土した青銅爵および採集によって得られたと考えられる青銅爵については、その時期に区分した明確な根拠は、報告書中では示されていない。このような状況下、本稿では、上に挙げた 7 基の墓の年代を信頼に足るものと考え、また特にその中でも典型的な形態を備えた青銅爵を、年代を考える際の基準とした。すなわち、(1) 白家荘 M7:2〔二里岡下層 2 期〕, (2) 北二七路 M1:12〔二里岡上層 1 期〕, (3) 北二七路 M2:2〔二里岡上層 1 期〕、以上の 3 点である。【図 5】中で示された，上記 3 点以外の爵については、報告書で示された年代観をある程度考慮しつつ、一方で各部分の型式変化に合わせて分類を行った。

6) なお、このような現象は殷から周へと政権交代した際にも見られる現象である。例えば、西周時期の洛陽では、青銅器製作工房址と考えられる遺跡のごく近くで殷人墓が発見されており、これらの殷人墓の被葬者は青銅器生産に従事した工人であるとする説がある（飯島 2002)。一方、殷後期の都址である安陽の孝民屯青銅器製作工房址でも、西周初期の青銅器に相当する鋳型が発見されており、その下限が西周初期にまで下る可能性があるとされている（難波 2005)。

引用文献リスト

［日文］

飯島武次 1979「殷前期の提言 (8)：青銅器 (Ⅰ)」『古代文化』31(4)：1-17

飯島武次 1985『夏殷文化の考古学研究』山川出版社

飯島武次 2002「西周雒邑の鋳銅遺跡と殷人墓」『日々の考古学』東海大学考古学研究室，365-379

飯島武次 2003『中国考古学概論』同成社

江上波夫 1935「綏遠青銅器」東亜考古学会『内蒙古・長城地帯』，1-205

高浜秀 1997「江上波夫の内蒙古における調査とオルドス青銅器研究」『精神のエクスペディシオン：学問の過去・現在・未来』東京大学，84-89

東京帝國大學文學部考古學研究室 1936『東京帝國大學文学部 考古図編』10，美術工藝会

難波純子 1989「初現期の青銅彝器」『史林』72(2)：76-112

難波純子 2005「商末周初青銅器の製作地」小南一郎『京都大学人文科学研究所研究報告：中国文明の形成』朋友書店，71-96

林巳奈夫 1984『殷周青銅器総覧』吉川弘文館

三船温尚・清水克朗 1996「中国古代青銅器の鋳造技法その三：爵に関する調査報告及び考察」『高岡短期大学紀要』7：97-131

宮本一夫 2009「青銅彝器の製作技術から見た二里頭文化から二里岡文化への変遷」宮本一夫・白雲翔編『中国初期青銅器文化の研究』九州大学出版会，35-56

［中文］

郭宝鈞 1981『商周銅器群綜合研究』文物出版社

河南郾城県志総編室（孟新安）1987「郾城県出土一批商代青銅器」『考古』1987(8)：765-766
≪河南省出土商周青銅器≫編輯組編 1981『河南省出土商周青銅器 (一)』文物出版社
河南省新郷市博物館（孔徳新）1980「河南新郷市博物館蔵幾件商代早期青銅器」『文物資料叢刊』3：33-34
河南省文物研究所 1983「鄭州北二七路新発現三座商墓」『文物』1983(3)：60-77
河南省文物研究所 1988「許昌県大路陳村発現商代墓」『華夏考古』1988(1)：23-26
河南省文物研究所 1989「鄭州商代二里岡期鋳銅基址」『考古学集刊』6：100-122
河南省文物研究所・中国歴史博物館考古部編 1992『登封王城崗与陽城』文物出版社
河南省文物考古研究所 2001『鄭州商城：1953 年 -1985 年考古発掘報告』文物出版社
河南省文物考古研究所 2003「鄭州商城新発現的幾座商墓」『文物』2003(4)：4-20
河南省博物館・霊宝県文化館（楊育彬）1979「河南霊宝出土一批商代青銅器」『考古』1979(1)：20-22
河北省博物館編 1999『河北省博物館文物精品集』文物出版社
河北省文物研究所 1985『藁城台西商代遺址』文物出版社
韓明祥 1982「山東長清、桓台発現商代青銅器」『文物』1982(1)：86-87
黄岡地区博物館・黄州市博物館 1993「湖北省黄州市下窯嘴商墓発掘簡報」『文物』1993(6)：56-60
孔繁銀 1959「山東滕県井亭煤礦等地発現商代銅器及古遺址、墓葬」『文物』1959(12)：67-68
故宮博物館編 1999『故宮青銅器』紫禁城出版社
湖北省文物考古研究所 2001『盤龍城：1963 年～ 1994 年考古発掘報告』文物出版社
左忠誠 1987「渭南市又出土一批商代青銅器」『考古与文物』1987(4)：111
山西省文管会（郭勇）1980「山西長子県北郊発現商代銅器」『文物資料叢刊』3：198-201
山東省博物館 1964「山東長清出土的青銅器」『文物』1964(4)：41-47
秋維道・孫東位 1980「陝西礼泉県発現両批商代銅器」『文物資料叢刊』3：28-31
周口地区文化局・項城県人民文化館（鄧同徳）「河南項城出土商代前期青銅器和刻文陶拍」『文物』1982(9)
新来・周到 1966「河南省博物館所蔵幾件青銅器」『考古』1966(4)：219-220
鄒衡 1980「試論夏文化」『夏商周考古学論文集』文物出版社，95-182
随州市博物館 1981「湖北随県発現商代青銅器」『文物』1981(8)：46-48
陝西省考古研究所・陝西省文物管理委員会・陝西省博物館編 1979『陝西出土商周青銅器』1，文物出版社
曹瑋主編 2006『漢中出土商代青銅器 第一巻』巴蜀書社
中国社会科学院考古研究所 1999『偃師二里頭：1959 年 -1978 年考古発掘報告』中国大百科全書出版社
中国社会科学院考古研究所 2003『中国考古学：夏商巻』中国社会科学出版社
中国社会科学院考古研究所・中国歴史博物館・山西省考古研究所編 1988『夏県東下馮』文物出版社
中国青銅器全集編輯委員会編 1996『中国青銅器全集 第一巻 夏、商（一）』文物出版社
中国美術全集編輯委員会編『中国美術全集 工芸美術編 4 青銅器 (上)』文物出版社 1985
中国歴史博物館考古部・山西省考古研究所 1997「1988 ～ 1989 年山西垣曲古城南関商代城址発掘簡報」『文物』1997(10)：12-29
長治市博物館（王進先）1982「山西長治市揀選、征集的商代青銅器」『文物』1982(9)：49-52
張久益 1983「臨汝県李楼出土商代青銅器介紹」『中原文物』1983(3)：85
趙新来 1980「中牟出土商代青銅器」『河南文博通訊』1980(4)：59
張松林 1986「鄭州市西北郊区考古調査簡報」『中原文物』1986(4)：1-11
趙炳煥・白秉乾 1992「河南省新鄭県新発現的商代銅器和玉器」『中原文物』1992(1)：85-90
滕州市博物館 1993「山東滕州市発現商代青銅器」『文物』1993(6)：95-96
滕州市博物館 1996「山東滕州市蔺河下游出土的商代青銅器」『考古』1996(5)：29-31
杜金鵬 1994「商周銅爵研究」『考古学報』1994(3)：263-298
寧景通 1993「河南伊川県発現商墓」『文物』1993(6)：61-64
馬全 1988「焦作南朱村発現商代墓」『華夏考古』1988(1)：28-29

武陟県文化館 1980「武陟県早商墓葬清理簡報」『河南文博通訊』1980(3)：38-39
北京市文物管理処 1977「北京市平谷県発現商代墓葬」『文物』1977(11)：1-8
保全 1981「西安老牛坡出土商代早期文物」『考古与文物』1981(2)：17-18
保利蔵金編輯委員会 1999『保利蔵金』嶺南美術出版社
宝鶏市博物館（王光永）1977「陝西省岐山県発現商代銅器」『文物』1977(12)：86-87
宮本一夫 2006「二里頭文化青銅彝器的演変及意義」杜金鵬・許宏主編『二里頭遺址与二里頭文化研究：中国・二里頭遺址与二里頭文化国際学術研討会論文集』科学出版社，205-221
孟憲武 1985「安陽三家荘発現商代窖蔵青銅器」『考古』1985(12)：1139-1140
楊徳標 1992「安徽省含山県出土商周青銅器」『文物』1992(5)：92-93
李済・万家保 1966『中国考古報告集新編 古器物研究専刊 第 2 本 殷墟出土青銅爵形器之研究』中央研究院歴史語言研究所
臨汝県文化館 1983「河南臨汝県李楼出土商代青銅器」『考古』1983(9)：839-840
臨汝県文化館 1985「河南臨汝出土一批商周青銅器」『考古』1985(7)：664-665

［英文］
N.Barnard ＆ Cheung Kwong-yue1983 ‘Notes on Casting Technology and Some New Interpretations of Historical Significance’ “Studies in Chinese Archaeology, 1980-1982：Reports on Visits to Mainland China, Taiwan, and the USA; Participation in Conferences in these Countries; and some Notes and Impressions” Wen-hsueh-she，355-357

なお、【表 1】の作成に当たっては、この他に多数の報告書・簡報・図録を参考にした。

図版出典

図 1　c1223 青銅爵（東京大学文学部列品室所蔵）
図 2　c1224 青銅爵（東京大学文学部列品室所蔵）
図 3　鄭州南関外遺跡で出土した青銅爵の鋳型（1．爵外范 C5:T69:1:45　2．爵外范 C5:3H310:24）
図 4　二里岡期青銅爵の出土地点
図 5　二里岡期青銅爵の型式変化
図 6　鋳型構造の変化
・図 1、図 2、図 4 は筆者作成。
・図 3 は（河南省文物研究所 1989）より転載及び一部加筆。
・図 5 は各種報告書・簡報・図録等を参考にして、筆者作成。
・図 6 は（宮本 2009）より転載及び一部修正。

表 1　二里頭期～殷代中期の青銅爵一覧

A．鄭州商城で出土したもの

No.	省	市	出土地点	所蔵館及び編号	通高	流尾長	器身	柱帽	柱	頸部紋様	腹部紋様	足部范線	底部范線	鏤孔の有無	出土状況
1	河南	鄭州	白家荘 M32:2	—	16	15.6	A	a	双	弦紋	なし	有	不明	無	墓
2	河南	鄭州	白家荘	豫文 104	17	14.6	A	a	双	弦紋	なし	有	不明	無	採集
3	河南	鄭州	白家荘 M7:2	—	17	17	A	a	双	弦紋	なし	有	不明	無	墓
4	河南	鄭州	白家荘 M7:3	—	14	14.5	A	a	双	弦紋＋乳丁紋	なし	有	不明	無	墓
5	河南	鄭州	白家荘 M125:1	—	15.4	14.7	A	a	双	弦紋	なし	不明	不明	無	墓
6	河南	鄭州	銘功路 M2:14	—	13.5	11.8	A	a	双	弦紋	なし	有	不明	無	墓
7	河南	鄭州	銘功路 M2:22	—	13.5	11.1	A	a	双	弦紋	なし	有	不明	無	墓
8	河南	鄭州	人民公園 M25:1	—	15	13.6	A	a	双	弦紋	なし	有	不明	無	墓
9	河南	鄭州	1964 熊耳河	鄭博 0159	15.4	14.3	A	a	双	弦紋	なし	有	不明	無	不明
10	河南	鄭州	西北郊区・堂李	—	—	—	A	a	双	弦紋	なし	有	不明	無	不明
11	河南	鄭州	隴海北二街 M1:1	—	14.5	14.3	A	a	双	弦紋	なし	不明	不明	無	墓
12	河南	鄭州	1959 楊荘	豫 0018	14.8	16.5	A	a	双	獣面紋	なし	有	不明	無	不明
13	河南	鄭州	人民公園 M46:1	—	残 7.3	6.8	A	欠	—	饕餮紋	なし	不明	不明	無	墓
14	河南	鄭州	1964 楊荘	豫 1187	15.2	13.2	B	a	双	獣面紋	なし	有	不明	無	不明
15	河南	鄭州	銘功路 M148:10	—	17.3	17	B	a	双	饕餮紋	なし	不明	不明	無	墓
16	河南	鄭州	1958 人民公園	豫 0126	16	14.6	B	a	双	饕餮紋	なし	有	不明	無	不明
17	河南	鄭州	西大街東段 T61M1:3	—	15.2	15.5	B？	a	双	饕餮紋	なし	不明	不明	無	墓
18	河南	鄭州	人民路 T17M2:2	—	18.2	17.7	B	a	双	饕餮紋	なし	不明	不明	無	墓
19	河南	鄭州	北二七路 M2:2	北京大学サックラー考古与芸術博物館	15.8	14.7	B	a	双	三角紋	なし	有	無	無	墓
20	河南	鄭州	銘功路 M2:21	—	17	15.5	B	b	双	饕餮紋	なし	有	不明	無	墓
21	河南	鄭州	白家荘 M2:8	—	18.5	17	B	b	双	饕餮紋	なし	有	不明	無	墓
22	河南	鄭州	白家荘	—	14	13	B	b	双	饕餮紋	なし	不明	不明	無	不明
23	河南	鄭州	北二七路 M1:12	—	15.2	13	B	b	双	饕餮紋	なし	有	有	無？	墓
24	河南	鄭州	二里岡 M1:2	—	18	14	B	b	双	饕餮紋	なし	不明	不明	無	墓
25	河南	鄭州	白家荘 M3:1	—	17.5	15.5	B′	c	双	饕餮紋	饕餮紋	不明	不明	無	墓
26	河南	鄭州	1954 楊荘	豫 1167	18.7	14	B′	d	単	饕餮紋	饕餮紋	不明	不明	無	不明
27	河南	鄭州	1974 年	豫 1444	21.2	17	B′	c	双	饕餮紋	饕餮紋	有	不明	不明	不明
28	河南	鄭州	1958 年	鄭博 0049	14.6	13	C	a	双	斜方格紋 / 獣面紋	なし	有	不明	無	不明
29	河南	鄭州	1958 年	鄭博 0050	14.4	14.1	C	a	双	弦紋＋乳丁紋	なし	不明	不明	無	不明
30	河南	鄭州	1958 楊荘	鄭博 0223	17	14.5	C？	d	単	饕餮紋	なし	不明	不明	不明	不明
31	河南	鄭州	銘功路 M4:1	鄭博	17.6	14.2	特殊	a	双	雷紋	饕餮紋	不明	不明	欠	墓
32	河南	鄭州	西北郊区・堂李	—	—	—	—	—	—	弦紋＋乳丁紋	なし	不明	不明	不明	不明
33	河南	鄭州	銘功路 M125:4	—	—	—	—	—	—	—	—	不明	不明	不明	墓

B．盤龍城遺跡で出土したもの

No.	省	市	出土地点	所蔵館及び編号	通高	流尾長	器身	柱帽	柱	頸部紋様	腹部紋様	足部范線	底部范線	鏤孔の有無	出土状況
34	湖北	武漢	王家嘴 T82H7:5	—	16	—	A	a	双	饕餮紋	なし	有	不明	無	灰坑
35	湖北	武漢	楊家湾 M6:1	—	—	—	A	a	双	獣面紋	なし	有	有	無	墓
36	湖北	武漢	楊家嘴 M1:5	—	18.8	16	A	a	双	饕餮紋	なし	有	不明	無	墓
37	湖北	武漢	楊家嘴 M2:4	—	16.4	—	A	a	双	饕餮紋	なし	不明	不明	無	墓
38	湖北	武漢	楊家嘴 M2:5	—	15.2	14	A	a	双	饕餮紋	なし	不明	有	無	墓
39	湖北	武漢	楼子湾 M8:2	—	15.8	—	A	a	双	饕餮紋	なし	不明	不明	無	墓
40	湖北	武漢	楼子湾 M2:1	—	16.3	—	A	a	双	斜方格紋	なし	不明	有	無	墓
41	湖北	武漢	P:030	—	—	—	A	a	双	弦紋	なし	有	有	無	採集
42	湖北	武漢	楊家湾 M7:7	—	18.8	17.4	A	b	双	獣面紋	なし	有	不明	無	墓
43	湖北	武漢	楼子湾 M4:1	—	—	—	A	欠	—	饕餮紋	なし	不明	不明	欠	墓
44	湖北	武漢	楊家湾 H6:28	—	17	17	A	無	／	饕餮紋	円渦紋	有	不明	無	灰坑
45	湖北	武漢	李家嘴 M2:11	—	16.8	—	B	a	双	饕餮紋	なし	不明	不明	無	墓
46	湖北	武漢	李家嘴 M2:23	—	14.4	—	B	a	双	弦紋	なし	有	不明	無	墓
47	湖北	武漢	楊家湾 M11:50	—	14.4	13.6	B	a	双	弦紋	なし	有	有	無	墓
48	湖北	武漢	盤龍城城址 M1:1	—	16.9	—	B	b	双	饕餮紋	なし	不明	不明	無	墓
49	湖北	武漢	李家嘴 M1:15	—	17	15.6	B	b	双	饕餮紋	なし	不明	有	無	墓
50	湖北	武漢	楊家湾 M5:4	—	16	14.4	B	b	双	饕餮紋	なし	有	不明	欠	墓
51	湖北	武漢	楊家湾 H6:30	—	16	残 11.2	B	b	双	饕餮紋	なし	有	不明	無	灰坑
52	湖北	武漢	楼子湾 M3:4	—	14.4	—	B	b	双	饕餮紋	なし	不明	有	無	墓
53	湖北	武漢	李家嘴 M2:12	—	15.1	16.7	B	d	単	饕餮紋	なし	有	不明	無	墓
54	湖北	武漢	李家嘴 M1:16	—	20.1	16.8	B	d	d	饕餮紋	なし	有	有	無	墓
55	湖北	武漢	楊家湾 M4:14	—	—	—	B	d	単	饕餮紋	なし	有	不明	無	墓
56	湖北	武漢	楊家湾 T38 ④:1	—	17	—	B	d	単	饕餮紋	なし	有	不明	無	文化層
57	湖北	武漢	P:04	—	16	—	B	d	単	饕餮紋	なし	有	有	欠	採集
58	湖北	武漢	李家嘴 M2:21	—	—	—	B	欠	—	饕餮紋	なし	不明	不明	無	墓
59	湖北	武漢	李家嘴 M1:17	—	—	—	B	欠	—	饕餮紋	なし	不明	有	欠	墓
60	湖北	武漢	P:032	—	—	—	B	欠	—	獣面紋＋饕餮紋	なし	有	不明	欠	採集
61	湖北	武漢	P:033	—	19.2	—	B′	d	単	饕餮紋	饕餮紋	不明	不明	無	採集
62	湖北	武漢	王家嘴 M1:11	—	18.2	—	C	a	双	弦紋	饕餮紋	有	不明	無	墓
63	湖北	武漢	楊家湾 M11:6	—	15.2	残 10.8	C	a	双	饕餮紋	なし	不明	不明	無	墓
64	湖北	武漢	楊家湾 M11:4	—	14.8	15	C	a	双	なし	なし	不明	不明	無	墓
65	湖北	武漢	楊家湾 M11:57	—	14.8	12.8	C	a	双	弦紋	なし	不明	不明	無	墓
66	湖北	武漢	楼子湾 M10:6	—	15.6	—	C	a	双	饕餮紋	なし	不明	有	無	墓
67	湖北	武漢	P:037	—	—	—	C	a	双	弦紋	なし	有	有	無	採集
68	湖北	武漢	王家嘴 T61 ⑥:13	—	—	—	C	欠	—	連珠紋	饕餮紋	不明	不明	無	文化層

69	湖北	武漢	P:031	—	—	—	C	欠	—	饕餮紋	なし	有	不明	欠	採集
70	湖北	武漢	楊家湾 M3:1	—	14.4	—	特殊	b	双	弦紋	なし	不明	不明	無	墓
71	湖北	武漢	楊家湾 M4:3	—	19.6	17.2	特殊	b	双	獣面紋	なし	不明	不明	無	墓

C．その他の地域で出土したもの

No.	省	市	出土地点	所蔵館及び編号	通高	流尾長	器身	柱帽	柱	頸部紋様	腹部紋様	足部范線	底部范線	鏤孔の有無	出土状況
72	河南	輝県	琉璃閣 M110:11	—	14.2	13.8	A	a	双	雷紋	なし	有	有	無	墓
73	河南	新鄭	—	—	12.8	—	A	a	双	なし	なし	不明	不明	無	不明
74	河南	新鄭	郭店郷陵崗村	—	14.5	残 13.2	A	a	双	弦紋	なし	不明	不明	無	不明
75	河南	新鄭	—	—	14.5	—	A	a	双	なし	なし	不明	不明	不明	不明
76	河南	新鄭	—	—	18	—	A	a	双？	饕餮紋	なし	不明	不明	無	不明
77	河南	獲嘉	1965 東張居	新博 1315	16	16.6	A	a	双	キ紋	なし	有	不明	不明	不明
78	河南	武陟	1978 寧郭大駕	—	16	—	A	a	双	獣面紋	なし	有	不明	無	墓
79	河南	臨汝	1978 李楼	—	15	14	A	無	／	斜方格紋	なし	有	不明	無	不明
80	河南	臨汝	1987 李楼	—	14.5	残 6	A	a	双	饕餮紋	なし	有	不明	無	墓
81	山西	垣曲	M 16:9	—	16.5	14.4	A	a	双	饕餮紋	なし	不明	不明	無	墓
82	河南	臨汝	騎嶺大張	—	—	14	A	欠	—	獣面紋	なし	有	不明	無	不明
83	河北	藁城	台西M 14:2	—	15	—	A	欠	双	饕餮紋	なし	不明	不明	無	墓
84	河南	新鄭	—	—	14.5	—	A	不明	双	饕餮紋	なし	不明	不明	無	不明
85	河南	輝県	1952 年	新博 0114	14.8	13.1	A	c	双	饕餮紋	なし	有	不明	無	不明
86	河南	焦作	1984 南朱	—	14	15.3	B	a	双	円圏紋	なし	有	不明	無	墓
87	河南	新鄭	—	—	18	15	B	a	双	饕餮紋	なし	有	有	無	不明
88	河南	新鄭	—	—	16	—	B	a	双	饕餮紋	なし	不明	不明	無	不明
89	河南	中牟	1979 大荘	—	19	—	B	a	双	饕餮紋	なし	不明	不明	不明	採集
90	山西	平陸	前荘	山西博物院	—	—	B	a	双	饕餮紋	なし	有	不明	不明	不明
91	湖北	黄州	1992 下窯嘴	—	18.8	—	B	b	双	なし	饕餮紋	不明	不明	不明	墓
92	河北	邯鄲	—	河北省博物館	17	—	B	c	単	弦紋	なし	有	不明	無	不明
93	河南	輝県	琉璃閣M 203:1	—	—	—	B	d	双	弦紋	なし	有	有	無	墓
94	山東	長清	1980 帰徳前平	済南市博物館	15	15	B	無	／	饕餮紋	なし	不明	不明	無	不明
95	河南	項城	1976 毛塚	—	16	14.8	B	d	単	饕餮紋	なし	有	有	不明	不明
96	河南	許昌	1986 大路陳 / 採 5	河南省文物研究所	残 16	—	B	欠	—	饕餮紋	なし	不明	不明	無	墓
97	河南	新鄭	陸荘高広民院	—	15.5	—	B	欠	—	饕餮紋	なし	不明	不明	無	不明
98	河南	洛陽	1953 年	河南省博物館	20.8	—	B′	a	双	饕餮紋	饕餮紋	不明	不明	無	不明
99	河南	郾城	1979 孟廟攔河潘	郾城県許慎紀念館	23	17	B′	b	双	饕餮紋	饕餮紋	有	不明	無	不明
100	湖北	随県	1977 淅河	随州市博物館	22	17	B′	d	双	饕餮紋	饕餮紋	有	有	無	不明
101	安徽	肥西	1965 館鐸	安徽省博物館	37.8	21.5	B′	d	単	獣面紋	獣面紋	有	不明	無	不明
102	陝西	岐山	京当	宝鶏青銅器博物館	21.9	25.3	B′	d	単	饕餮紋	饕餮紋	有	有	無	灰坑

103	河北	藁城	台西 C:14	—	18.7	—	B′	d	単	饕餮紋	饕餮紋	有	不明	無	不明
104	河南	輝県	琉璃閣 M148:1	中国歴史博物館	17	14.2	B′	欠	単	饕餮紋	饕餮紋	有	不明	無	墓
105	安徽	嘉山	泊崗	—	26.5	20.3	B′	欠	単	饕餮紋	饕餮紋	不明	不明	無	不明
106	河南	中牟	1974 黄店	河南省博物館	14.5	—	C	a	双	連珠紋	獣面紋	有	有	無	不明
107	河南	登封	1975 袁橋	—	14	13.6	C	a	双	弦紋＋連珠紋	饕餮紋	不明	不明	無	不明
108	河南	登封	王城崗 WT245M49:2	—	15	—	C	a	双	弦紋	連珠紋	有	不明	無	墓
109	河南	新鄭	陸荘高広民院	—	16.5	13.5	C	a	双？	饕餮紋	饕餮紋	不明	不明	欠	不明
110	河南	獲嘉	1975 照鏡	新博 0122	15.6	14.8	C	a	双	弦紋	饕餮紋	有	不明	無	不明
111	山西	夏県	東下馮M 4:1	—	12	14	C	a	双	なし	なし	不明	不明	無	墓
112	山東	滕州	1992 官橋鎮軒轅荘	滕州市博物館	19	14.5	C	b	双	弦紋	なし	不明	不明	無	墓
113	山東	滕州	1981 官橋鎮大康留	滕州市博物館	16	13	C	b	双	弦紋	なし	不明	不明	無	不明

※　この他に、偃師，禹県，許昌（以上河南省）、撫順（遼寧省）から、計 5 点の二里岡期青銅爵が出土しているが、詳細が不明のため、表には掲載しなかった。
以上を、No. 114 ～ No. 118 とする。

D．各地の博物館の所蔵品

No.	省	市	所蔵館	編号	通高	流尾長	器身	柱帽	柱	頸部紋様	腹部紋様	足部范線	底部范線	鏤孔の有無	出土状況
119	—	—	上海博物館	—	14	14.6	A	a	双	獣面紋	なし	有	不明	無	不明
120	—	—	上海博物館	—	14.9	16.5	A	a	双	雷紋	なし	不明	不明	無	不明
121	—	—	保利芸術博物館	—	15.8	16.6	A	a	双	弦紋	なし	有	不明	無	不明
122	—	—	東京国立博物館	TJ5540	16.3	13.6	A	a	双	雷紋	なし	有	有	無	不明
123	—	—	東大文学部列品室	c 1223	13	14.5	A	a	双	連珠紋	なし	有	有	有	不明
124	—	—	上海博物館	—	14.6	15.4	B	a	双	獣面紋	なし	有	有	無	不明
125	—	—	上海博物館	—	15.1	11.9	B	a	双	斜方格紋	なし	不明	不明	無	不明
126	—	—	上海博物館	—	17	14.7	B	a	双	弦紋	なし	有	不明	無	不明
127	—	—	上海博物館	—	15.9	15.1	B	欠	—	獣面紋	なし	有	不明	無	不明
128	—	—	北京故宮	—	16.1	14.8	B	欠	—	饕餮紋	なし	有	有	不明	不明
129	—	—	東京国立博物館	TJ5718	—	—	B	d	単	獣面紋	なし	不明	不明	無	不明
130	—	—	泉屋博古館	彝 85	22.7	—	B′	a	双	饕餮紋	饕餮紋	有	有	無	不明
131	—	—	上海博物館	—	18.3	17.1	C	a	双	獣面紋	獣面紋	有	不明	無	不明
132	—	—	上海博物館	—	18.6	18	C	a	双	獣面紋	獣面紋	有	不明	無	不明
133	—	—	上海博物館	—	16	17	C	a	双	斜方格紋＋獣面紋	なし	有	不明	無	不明
134	—	—	北京故宮	—	残 9.2	14.1	C	a	双	斜方格紋	なし	欠	不明	無	不明
135	—	—	保利芸術博物館	—	13.5	16.2	C	a	双	饕餮紋	なし	有	有	無	不明
136	—	—	上海博物館	—	14.6	15	C	a	双	なし	獣面紋	有	不明	無	不明
137	—	—	奈良国立博物館	—	—	—	C	a	双	弦紋	なし	有	不明	無	不明
138	—	—	奈良国立博物館	—	—	—	C	b	双	弦紋	なし	有	不明	無	不明
139	—	—	奈良国立博物館	—	—	—	C	無	／	弦紋	弦紋	不明	不明	無	不明

140	—	—	東大文学部列品室	c 1224	残 11.8	—	C	欠	—	弦紋＋乳丁紋	なし	無	無	無	不明

E. 殷代中期の青銅爵

No.	省	市	出土地点或は所蔵館	所蔵館及び編号	通高	流尾長	器身	柱帽	柱	頸部紋様	腹部紋様	足部范線	底部范線	鏤孔の有無	出土状況
1	河南	安陽	1964 三家荘	—	14.7	14.3	D	d	双	なし	弦紋	不明	不明	無	採集
2	山西	長治	1976 白兔南村	長治市博物館	17.4	14	D	d	双	なし	弦紋	不明	不明	無	墓
3	河北	藁城	台西 M22:6	—	17.2	—	D	d	双	なし	弦紋	不明	不明	無	墓
4	河北	藁城	台西 M85:4	—	—	—	D	d	双	なし	弦紋	不明	不明	無	墓
5	陝西	西安	1972 老牛坡	—	17.2	14.2	D	d	双	なし	弦紋	不明	不明	無	不明
6	湖北	安陸	碧溳	—	—	—	D	不明	不明	なし	弦紋	不明	不明	不明	不明
7	北京	平谷	劉家河	—	16.1	14	D	d	双	なし	饕餮紋	不明	不明	無	墓
8	河北	藁城	台西 M35:3	—	17	—	D	d	双	なし	饕餮紋	不明	不明	無	墓
9	河南	鄭州	南順街 H1 上 :7	—	18.3	15.2	D	d	双	なし	饕餮紋	不明	不明	無	窖藏
10	河南	滕州	1978 官橋鎮前掌大	滕州市博物館	17	14.5	D	d	双	なし	饕餮紋	不明	不明	無	墓
11	河南	霊宝	文底東橋	—	15.7	13.1	D	d	双	なし	饕餮紋	不明	不明	無	不明
12	河南	安陽	小屯丙組 M333	史語所 R2031	14.6	—	D	d	双	なし	饕餮紋	不明	不明	無	墓
13	河南	安陽	小屯丙組 M388	史語所 R2033	13.9	13	D	d	単	なし	饕餮紋	不明	不明	無	墓
14	河南	安陽	小屯丙組 M331	史語所 R2027	13.3	13.7	D	d	単	なし	饕餮紋	不明	不明	無	墓
15	河南	安陽	小屯丙組 M329	史語所 R2032	13.8	14.5	D	d	単	なし	饕餮紋	有	不明	無	墓
16	陝西	城固	1981 龍頭鎮	陝西歴史博物館	17	13	D	d	単	なし	獣面紋	有	不明	無	不明
17	山西	長子	1971 北高廟	長子県博物館	17	—	D	d	単	なし	獣面紋	不明	不明	無	不明
18	河北	藁城	台西M 79:4	—	19	—	D	d	単	なし	饕餮紋	不明	不明	無	墓
19	河南	鄭州	南順街 H1 上 :8	—	残 16.3	14.3	D	欠	—	なし	饕餮紋	不明	不明	無	窖藏
20	湖北	随県	1977 淅河	随州市博物館	16	13.4	D	欠	単	なし	饕餮紋	不明	不明	欠	不明
21	安徽	含山	1989 孫家崗	—	18	16	D	欠	単	なし	饕餮紋	不明	不明	欠	墓
22	陝西	西安	1971 老牛坡	—	16.8	14.6	D	d	単	なし	雷紋	不明	不明	無	不明
23	陝西	渭南	姜河村	—	15.4	12.8	D	d	双	なし	饕餮紋	不明	不明	無	不明
24	—	—	上海博物館	—	19.6	15	D	b	双	なし	獣面紋	有	不明	無	不明
25	—	—	東京国立博物館	TJ5552	16.5	14.3	D	b	双	なし	饕餮紋	有	無	無	不明
26	—	—	泉屋博古館	彝 257	—	—	D	d	双	なし	饕餮紋	不明	無	無	不明
27	河南	滕州	1973 官橋鎮呂楼	滕州市博物館	12.8	—	特殊	欠	—	なし	弦紋	不明	不明	無	不明
28	河南	伊川	1986 高山郷	—	—	—	特殊	—	双	不明	不明	不明	不明	無	墓

F. 二里頭期の青銅爵一覧

No.	省	遺跡名	遺構名	所蔵館	通高	流尾長	器身のくびれ	柱帽	柱	頸部紋様	腹部紋様	足部范線	底部范線	鏤孔の有無	出土状況
1	河南	二里頭	Ⅷ区 T22 ③ :6	—	12	13.6	無	無	／	なし	なし	無	不明	無	文化層
2	河南	二里頭	Ⅳ区 KM3:4	—	13.3	14.5	有	無	／	なし	なし	無	不明	有	墓
3	河南	二里頭	Ⅲ区 KM6:1	—	13.3	14.9	有	無	／	なし	なし	無	不明	有	墓
4	河南	二里頭	Ⅴ区 KM8:1	—	15	15	無	無	／	なし	なし	無	不明	無	墓
5	河南	四角楼	1965 採集	—	16	—	無	有	双	なし	なし	不明	不明	欠	採集
6	河南	四角楼	Ⅶ区 KM7:1	洛陽博物館	26.5	31.5	有	有	双	なし	乳丁紋	無	不明	有	墓
7	河南	二里頭	75YL Ⅳ区	—	17	16.8	無	無	／	なし	なし	無	不明	無	採集
8	河南	二里頭	1984 年	—	20.7	26.2	無	有	双	なし	なし	無	不明	無	不明
9	河南	新鄭	1974 望京楼	—	15.4	18.9	有	有	双	なし	なし	無	不明	有	採集？
10	河南	商丘	1964 年	天津市歴史博物館	19.7	17	有	なし？	—	なし	なし	無	不明	有	不明
11	—	—	—	上海博物館	11.7	14.1	有	なし	—	なし	なし	無	不明	無	不明
12	—	—	—	上海博物館	／	／	I	なし	—	なし	なし	無	無	無	不明

东京大学文学部陈列室收藏的青铜爵的制造技术

铃木　舞

引言

本文以东京大学文学部收藏的两件二里冈时期青铜爵为主要研究对象进行探讨。尤其是着眼于这件爵的制造技术，我对商代初期青铜器制造工人的文化系统进行了考察。

探讨之际，我首先根据器物类型确定了这两件青铜爵的制造年代。其次，关于这两件青铜爵的制造技术，尤其以器物表面上留下的合范线为主要线索进行探讨，试图复原制造这两件青铜爵时的陶范结构。我可以得出以下结论。关于这两件爵的其中之一，虽然从器物类型来看它相当于二里冈时期（即商代初期），但是从制造技术即陶范结构来看它所使用的是二里头时期（即夏代）的制造技术。由此，我推测商代初期青铜器制造工人的一部分可能是夏系统的制造工人。

到现在为止，关于“夏”商交替，一方面是文献史学者参考《史记》等的古典文献，以商汤王灭夏桀为商王朝的开始。另一方面是考古学者，则以“夏”墟的二里头遗址（现河南省偃师县郊外）的衰落以及以商代早期都城遗址的郑州商城（现河南省郑州市）的出现为商王朝建立的依据。上述的两种看法都是以当时的王族或者高级贵族为考察对象。这里准备从当时的青铜器制造工人入手，对于“夏”商交替的情况进行探讨。

一，关于本校收藏的青铜爵

东京大学文学部陈列室从 1930 年代以来收藏了两件青铜平底爵，编号为 c1223 和 c1224。我首先介绍一下这两件爵。

（1）c1223 青铜爵

c1223 青铜爵是平底爵。如（图 1）上出示，该爵有流、尾、柱、把手、三足等等。双柱立于流口。钮呈三角钉状。口沿有加厚唇边。直颈，孤肩腹。颈部饰联珠纹一周。通高 13 厘米，流尾长 14.5 厘米。

从制造技术方面来看，合范铸痕明显。底下有“Ｙ”字形范线。三足外面上都有中央范线。这样的合范痕迹表示铸造该爵时的陶范结构是由一块底部范和三块足部外面范组成的。还有，从（图 1）照片Ｅ，我们可以看出把手上有一个三角形的镂孔。对于器物类型而言，c1223 是典型的二里冈时期青铜爵。

（2）c1224 青铜爵

c1224 青铜爵也是平底爵。现在，该爵已经残缺。它的上部被切除。它原来具有流、口缘部、尾、把手等等。到了近代，它出土后有可能被切除了。从这件爵的颈部截断面，我们可以明显地看出用锋利的刀具截断的痕迹。该爵是前东京帝国大学学者江上波夫拿到日本来的。从器物的类型来看，该爵可能大体上相当于商代早期，即二里冈期。关于 c1224 青铜爵的合范方法，从（图二）来看，我们看不出来什么合范线。另外，三足部分既没有合范线，底部也没有。因此，该爵的底部范很可能是由三块范组成的。

二，关于青铜爵的研究史以及本校所藏的青铜爵的制造时期

本稿将本校所藏的青铜爵跟二里冈时期青铜爵进行比较研究，以确定本校收藏的青铜爵的年代。到现在为止，我们已发现了大约一百二十件二里冈时期青铜爵（表 1），其中从河南省郑州附近出土了一共三十三件二里冈时期青铜爵（图 4）。探讨之际，本文以从郑州出土的青铜爵为主要研究对象进行探讨。因为不仅商代早期都城遗址位于郑州从而郑州成为当时的中心地区，而且在郑州商城内也发现了铸铜作坊遗址从而明确这座城

址是当时的青铜器生产据点之一。

（1）青铜爵的类型变化

关于二里冈时期青铜爵的类型变化，参考最近出版的《郑州商城》等的发掘报告，我试作了二里冈时期青铜爵的编年。在对于年代进行整理之前，我首先要对于同一时期的不同形式进行分析。那么，商代早期的青铜爵有什么形式？从（图 5）来看，我们可以分为三种形式。第一种是器物体高比较矮，并有圆形的腹部。第二种是器物体高比较矮，并有比较直的腹部。第三种是器物体高比较高，并有圆形的腹部。为了方便起见，我将上述的各个形式分别称为 A 型、B 型、C 型。

其次，对于各个形式中的类型变化进行讨论。各类形状有什么变化？从（1）柱部分，（2）流和尾部分，（3）足高和三足的类型等等的特点来看，我们可以看出（图 5）这样的各个形式的类型变化。就是说，随着时间推移，柱部分越来越发达，流部分变得越来越短。足高变得越来越高同时变得越来越外反。

根据以上探讨，本校收藏的 c1223 青铜爵有可能相当于 A 型并归入于〈豫 0018〉青铜爵与〈白家庄 M7:3〉青铜爵之间的一个阶段。同时，c1224 青铜爵相当于 C 型而归入跟〈郑博 0050〉青铜爵同一时期，就是商代早期中最早的一个阶段。

（2）青铜爵的制造技术

对于青铜爵的制造技术，如今最新的是日本学者宫本一夫的研究。从（图 6），我们可以看出宫本的观察结果。根据他的研究，二里头时期使用“双范式”的外范结构，到了二里冈期，开始使用“三范式”的外范结构。如上所述，关于本校所藏的两件青铜爵的陶范结构，我们可以看出 c1223 青铜爵使用“三范式”，即典型的二里冈时期的陶范结构。又，c1224 青铜爵使用“双范式”、即二里头时期的技术制造的。

三，结语

总而言之，从器物类型来看，本校所藏的 c1224 青铜爵可以确定属于二里冈时期最早阶段。可是，从制造技术的方面来看，它是使用二里头时期制造技术。从器物的类型来看，这件爵属于商系统。同时，考虑到同一类型的青铜爵从郑州出土的这个情况，我们可以看出它的消费者（或墓主人）很可能是商系统的人。可是，对于制造工人而言，他们的一部分还使用二里头时期的制造技术。也就是说，他们的一部分有可能是“夏”系统的制造工人。这就表明在商代初期，“夏”代的青铜器制造工人也许仍有遗留。可以由此推测，在“夏”王朝被夺去了政权之后，保持当时最高的铸铜技术的“夏”王朝的青铜器制造工人，在商王政权下也许一直从事青铜器生产。在考察商王朝的成立时，这个事实可能是有用的线索。

关键字：青铜爵，合范线，陶范，制造技术，二里头时期，二里冈时期